

巻頭言

創造的技術のヒントは
自分の周りにある

機械1部

片桐 晴郎



ターボチャージャが初めて実用化されたのは70年程前であり、その後は軍用航空機の高空での高出力化手段として発展した。自動車用には20年前に開発・搭載され、一大ターボブームを引き起こしたのは記憶に新しいことである。

今日、ターボチャージャはディーゼルエンジンの更なる高出力・小型化、パティキュレート（微粒子）の低減といった商品性向上、環境対応エンジンに不可欠の手段となり、一段高い性能レベルと思い切った低コスト化が強く望まれ、開発が競われている。

このように自動車技術の多くは航空機技術を先行指標として発展・開花し、市場を大きく拡大してきた。そして、2つの業種は移動体という共通の技術分野で互いの技術をうまく活用・融合し、発展してきている。この身近な異業種、異分野の技術の中に、創造的で大きな花を咲かせるヒントが存在するように思う。

研究開発者は「創造性のある研究を」といわれると、何か非常に難しいことを要求されていると感じて居るのではないのでしょうか。研究者一人一人が異業種、異分野の技術動向に鋭い関心を持ち、その技術を自分の研究開発テーマに複合・融合させると何が創造されるか、絶えず好奇心を持って考えてみるところに付加価値の高い、創造的技術が生まれると思う。

「異質の技術が組み合わせられることにより、全く新しい価値が創造される」絶えず肝に銘じておきたい言葉である。